

日 時：平成 26 年 4 月 17 日（木） 14：00～16：00

場 所：公益社団法人 私立大学情報教育協会事務局会議室

出席者：内山委員長、山本委員、福島委員、高松委員、渡辺委員（ネット参加）

（事務局 井端事務局長、平田職員）

1. 検討事項

本年度の事業計画を確認した上で、本委員会の今後の研究の進め方として、予習の徹底による基礎知識の修得を目指して、基礎知識修得を確認するための反転学修の教材開発や実験的な導入について検討していくことを確認した。具体的には以下のとおり意見交換を行った。

<意見内容>

- ・（事務局より）東京大学の濱田総長の新聞記事では、大学教育は知識修得のみではなく、議論しながら考え方や考える力を養う場であるので、授業の在り方を転換していくべきと述べられている。ただ、教員が議論を中心とした授業方法に慣れておらず、学生一人ひとりに対応した教育体制に向けた意識改革がなされていないのではないか。そこで、今後は、アーカイブされた教材を活用して予習させ、授業では本質を議論するような反転授業の方法を検討していくべきではないか。
- ・MOOCの反転授業の実践例では、様々な考えをもった学生の視点を通じて議論していくことで、知の創造につながっていくのではないかと考えられる。例えば、医学分野では様々な領域が複合された教育であるので、授業では様々な視点からの議論を行い、知的好奇心や学生を刺激するような教育を行う。通常の授業時間では足りない部分は予習をしていくといった方法で反転授業を行うことができるのではないかと考えられる。反転授業は効率性を求めるのではなく、医学分野では新しい医療への道を開いていく土壌を教員が作れるのではないかと考えられる。
- ・反転授業はチュートリアルを上手く行えば可能であるが、実践してみるとなかなか難しい。トピックのように、ある特定のテーマについて反転授業は使えると思うが、全コースを反転授業で実践することは大変だと思う。
- ・イギリスのオックスブリッジ・カレッジのチュートリアルでは、週に1回1時間しか講義は行わず、予習と授業中の議論が中心になっており、8回しか実施されないが、人文社会科学系のエリート教育として定着している。
- ・反転授業では、様々な考え方や知識を予習し、授業での議論を通じて身につけていく学修のアウトカム以外に、例えば基礎医学的な内容の定着をはかるようなものなど、目的が異なる場合もある。
- ・医療以外にあらゆる科学も含めたこれまでと異なる視点で考えられる、知的好奇心を高揚させるような仕組みがどこかに必要ではないか。
- ・生理学であれば、生物と物理がわかっていると議論もできない。医学では知識が階層構造になっているのが特質であるので、まずは前提となる知識が多すぎており、卒前教育では議論を授業で展開するのは難しいと思われる。
- ・知識の定着の確認するために授業で反転授業を行うことは実施可能と思われる。
- ・PBLチュートリアルを実施しても、実施状況を客観的に評価する仕組みがなく、ペーパー試験での評価となっている。チュートリアルの実施態度は進級に関係ないため、学生が真剣になって取り組まず、予習が徹底化されないという実態となっている。
- ・医学部では教えなければいけない知識が多すぎるので、他分野と交えた議論はまだ難しいが、知識定着を目的に、eラーニングでの知識の予習と授業冒頭での知識獲得の確認時間を設けることは実践できると思う。
- ・反転授業を実施すると大半の学生は盛り上がるが、それでも学修しない学生が必ずいるので、そのような学生の対応をどうするのが課題である。
- ・反転授業はやる気のある学生の能力を伸ばすためのものであるが、現在の大学の悩みはやる気のない学生をいかに引き上げるかであるのが現状なので、今の医学部生の全員対象にするのは難しいのではないかと考えられる。
- ・もう一つ反転授業で問題となるのは、医学の場合は授業、教材をインターネット上で公開ができない

という点である。誰にでも公開できる情報ではない。

- 今の日本の医学教育には、解を導き出すために複雑な思考を行い、その評価を行うという仕組みがなく、国家試験自体もそのような仕組みになっていないので、世界をリードする教育や医療にならない。教育や医療をレベルアップするという共通理解していかないと、一歩が進まない。
- ハーバード大学のメディカルスクールでは、失敗させることが教育のミッションと考えていると紹介された。1大学では大変なので、他大学と連携して課題（事例）を作る仕組みにしている。
- 授業シナリオづくりなど反転授業のための準備・運営は大変である。
- リベラルアーツの教育では、反転授業を実施するには、科目数が多すぎるので、科目の統合を検討すべきと言われている。
- 医学はリベラルアーツの教育とはまた異なるが、決められた単位数の中で必要な教育をすべて行うことは時間的に難しいため、必要に応じて学ぶことができるPBLチュートリアルが必要になってくる。PBLチュートリアルのために自分で必要な情報を集めるというリテラシー教育も重要であるが、医学ではなおざりになっている。このようなリテラシー教育を徹底し、予習環境が整っていれば、PBLチュートリアルができる。
- 東京女子医科大学の1年生でPBLチュートリアルを行うことで学修スタイルを早くから身に付けることになっている。
- 学生は目的意識があれば学修するので、予習をすると自分はどのくらい伸びるのかというインセンティブを与えるような工夫が必要。
- リテラシーを学ぶためには、医療倫理の科目がよい。解のない問題なので、学生にとってみると知識は不要であると考えてしまうが、医療倫理で必要な知識を学生に気づかせるシミュレーションをする機会があるとよい。
- 倫理などに関係した視点で判断力を養う教育では、人文、社会科学分野とも連携しながら反転授業が活用できるのではないか。医療と経済など現在の医学で欠けている面を補うことができる。
- PBLチュートリアルの評価方法としてはトリプルジャンプがあり、口頭試問を行い、調べ学修でどのようなデータを使ったのかを確認する。実際にマックマスターで実施している。
反転授業は、基礎医学の知識を臨床に応用する前の3年生に導入するのがよい。

以上の意見を踏まえて、今後の委員会活動について検討した結果、JMOOCの予習教材を東京女子医科大学で作ってもらい、PBLを実験的に行うという案を東京女子医科大学に打診してみることにした。また、教材制作や授業のシナリオ作りについては委員会がアドバイザーとして関与していくことを確認した。

そこで、JMOOCの教材作成やPBLまでを東京女子医科大学で実施してもらえるかを打診した上で、高桑委員が出席できる日程で次回は6月に委員会を開催することにした。また、可能であれば理事長先生にも同席いただくことも相談してみることにした。